

平成16年度日本語教育短期研修報告

雑誌名	日本語教育論集
巻	21
ページ	62-63
発行年	2005-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1328/00001884/

平成 16 年度日本語教育短期研修報告

『日本語教育のための文法を考える』

日時：平成 16 年 7 月 24 日（金）

場所：国立国語研究所講堂

参加人数：172 名

「文法の教え方」は古くて新しいテーマである。これまでの「日本語の文法」の多くは、日本語母語話者の観点から書かれたものであり、日本語教育でも、そのような「日本語の文法」をどう運用に結びつけばよいかという方向で考えられてきた。しかし、「学習者にとって必要な日本語を効率よく学ぶ」という学習者の視点から見たとき、これまでの「文法」は学習者にとって本当に必要なものばかりだったか。また、学習者にとって親切的な「文法」になっていたか。この研修では、「所与のものと思われてきた文法を一旦白紙に戻し、文法をコミュニケーションを支える道具としてあらためて位置づける」ということについて、様々な観点から考えた。

【講演】

- ・日本語教育に役立つ日本語教育文法（北海道大学 小林ミナ）
- ・日本語学的文法から独立した日本語教育文法（広島大学 白川博之）
- ・習得研究を生かした日本語教育文法（電気通信大学 田中真理）
- ・対照研究を生かした日本語教育文法（国立国語研究所 井上優）
- ・コメント（大阪府立大学 野田尚史）
- ・質疑応答・ディスカッション

『言語テストと日本語教育』

日時：平成 16 年 8 月 21 日（土）・22 日（日）

場所：国立国語研究所講堂（21 日）・研修室（22 日）

参加人数：142 名（21 日）、39 名（22 日、ワークショップ）

日本語教師、学校経営者、留学生担当者など日本語教育関係者にとって、日本語テストを作成・実施することは重要な課題の一つであり、近年急速に発展してきた言語テストの作成方法、

測定理論、運営方法などを知ることは、実際に日本語テストを作成・実施する上で非常に役立つと考えられる。この研修では、現代の言語テストの動向、言語テストの作成方法、測定理論、運営方法を概観した上で、具体的なテスト項目作成方法と測定方法に関するワークショップを行った。

【講演】（21 日）

- ・現代言語テストの動向（国立国語研究所 菅井英明）
- ・言語テストの運営（立教大学 足立章子）
- ・アイテム作成方法の変遷（専修大学 赤木浩文）
- ・測定理論の変遷（常磐大学 中村洋一）

【ワークショップ】（22 日）

- A「アイテム作成方法」（専修大学 赤木浩文、立教大学 足立章子）
- B「測定の実際」（常磐大学 中村洋一、国立国語研究所 杉本明子）

『話しことば教育における学習項目』

（名古屋大学留学生センターと共催）

日時：平成 16 年 11 月 6 日（土）

場所：名古屋大学国際開発研究科棟

参加人数：116 名

「日本語でうまく話せるようになりたい」という学習者の思いに答えるべく、日本語教育の現場では、ロール・プレイ、インタビュー、ビジター・セッションなど、実際の言語使用に近い環境での練習方法が取り入れられてきた。このことは、話しことば教育において一定の成果を収めている。また、コミュニケーション・アプローチの導入や、会話・談話分析の研究成果を踏まえて、これまで、いくつかのシラバスが提案され、それらは、教科書の会話練習などにも取り入れられている。しかし、話しことば教育において、「何を」学習項目として取り上げればよいのかという共通認識は、まだ十分にあるとは言えない。実際には、日本語教科書の会話場面は、ある文型を定着させるための場面として

利用されることが多く、話すための学習項目を体系的に取り上げた教材の作成は、これからの課題といえる。この研修では、話すときに必要な「表現」、どのような順序で話すのかという「構造」、どのような音に乗せて伝えるのかという「音声」の三つの側面を取り上げ、話しことばの教育において取り上げるべき学習項目について考えた。

【講演】

- ・話しことば教育における言語・非言語的項目（早稲田大学 中井陽子）
- ・話しことば教育における機能項目とその構造（大阪外国語大学 筒井佐代）
- ・話しことば教育における音声の項目（広島大学 松崎寛）
- ・コメント（名古屋大学 尾崎明人）
- ・質疑応答・ディスカッション

『教室活動における「協働」を考える』

日時：3月20日（日）・21日（月・祝）

場所：国立国語研究所（立川新庁舎）講堂

参加人数：110名（20日、講演）、39名（21日、ワークショップ）

近年、日本語教育の世界では、「協働」をうたう教育実践を試みる教師が増え、口頭発表や研究誌などで数多く紹介されている。「協働」は広く注目され、日常的に使われる言葉となりつつあるが、「協働」とは何なのか、何を目的に「協働」は行われるのか、といった根本的な問題に関する議論の機会はあまりない。しかし、「なぜ協働なのか」ということを検討しないままの実践は、「協働」の十分な成果を生み出さないのではないか。この研修では、「協働」の意義を見直し、協働の目的は何か、協働が生かされる場や機会は何なのか、協働活動を促すためには何が必要か、協働のよさを生かすには教師はどうあるべきか、などについて、講演とワークショップを通じて検討した。

【講演】（20日）

- ・日本語教室で学習者は何を学んでいるか（人間環境大学 文野峯子）
- ・協働学習としてのピア・レスポンス（東京海洋大学 池田玲子）

- ・協働学習としてのピア・リーディング（東海大学 館岡洋子）

- ・質疑応答

【ワークショップ】（21日）

分科会A 「読む」協働活動

分科会B 「書く」協働活動

『作文添削の電子化・共有と、それを用いた応用研究の可能性』

日時：平成16年3月27日（日）

場所：国立国語研究所（立川新庁舎）多目的室
参加人数：10名（非公開形式）

昨今、学習者が日本語で書いた作文が大量に収集・電子化され、日本語教育に関する研究の材料として使用できるようになってきた。一方、作文に対する添削情報が、研究の材料として注目されることはこれまであまりなかった。その理由の一つとして、添削情報を共有可能な形で電子化する適切な方法がなかった、ということが挙げられる。今でも多くの場合添削は紙媒体によって行なわれているし、ワープロソフトの機能に依存して行なわれた添削はデータとしての互換性・汎用性が低く、共有データとするには向かない。しかし、添削情報が大量に収集され、統一された方法によって電子化されれば、様々な研究の可能性が開けてくる。特に、一つの作文に対し複数の添削情報を収集できれば、「添削者の属性による添削時の視点の違い」、「教師にとって添削が困難な誤用」、「誤用に対する許容度の度合いと添削者の属性との関係」について、研究を行なうことができる。国立国語研究所では平成14年に「XMLによる作文添削情報表示システム」を開発したが、今回電子化された添削情報を研究に活用するためにタグセットを新たに定義し直し、「XMLによる作文添削情報表示システム Ver.2」として再公開する予定である。この研修では、新バージョンの添削表示システムの仕様について説明し、添削タグ付与作業の実習を行うとともに、このシステムを用いて今後どのような研究が可能となるかについて議論した。

（記：井上優）